

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

西欧マルクス学におけるマルクス : D. マクレラン による

著者	小澤 光利
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	73
号	3
ページ	797-816
発行年	2006-03-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/3625

【研究ノート】

西欧マルクス学におけるマルクス

— D. マクレランによる —

小 澤 光 利

目 次

はじめに

1. マルクス研究3部作

2. マルクス100年；「回顧と展望」

1) 解釈の困難性をもたらす要因

2) 読み解く際の注意点

3. 「当時と現在」

1) 1960-70年頃の西欧マルクス学

2) 1970年代以降

3) その後

おわりに

はじめに

西欧「マルクス学 (marxology)」というのは、もちろん「西欧マルクス主義 (Western Marxism)」とは、まったく異なるものであろう。後者は、学術用語としても確定し、ほぼ標準的な内容理解が定着しているといっていよい。

例えば、Russell Jacoby によれば、「1920年代に中欧および西欧に生まれた哲学的政治的マルクス主義は、ロシア革命の達成を成文化したソヴィ

エト・マルクス主義に挑戦した。後に『西欧マルクス主義』と呼ばれるそれは、マルクス主義の強調点を政治経済と国家から文化、哲学そして芸術に移した」と特徴づけられ、イタリアのグラムシ、中欧のルカーチとコルシュ、1930年代からはフランクフルト学派が数えられている⁽¹⁾。もっと広い意味では、ソヴィエト版のマルクス主義理論を拒否するオーストロ・マルクス主義やバンネークに代表される「オランダ」マルクス主義等も含むとされているのであるが、同様の理解の下に Perry Anderson は、同名のアンソロジーを編み、またそれへの「序論」を独立の単行本として出版もしている⁽²⁾。

ところが、「マルクス学」のほうは、そうではない。なにしろ、手近な英和辞書を紐解いても、marxology という単語すら見出すことはできないからである。筆者がこの言葉を最初に知りえたのは、1970年代半ばの次に引く文脈においてであった。「今日、西ヨーロッパのマルクス研究は、……マルクス・ルネッサンスとよばれるほどの活況を呈しているけれども、……アカデミズムの立場からマルクスを一個の純然たる歴史的研究対象として扱うこの種のマルクス研究は、西ヨーロッパ的世界では『マルクス学』(marxology) ともよばれて、今ではマルクス研究の無視することのできぬ一潮流をかたちづくっている。」⁽³⁾その際、当該箇所では「西欧マルクス学」の代表者として引き合いに出されていたのは David McLellan であったが、「アカデミズムの立場からマルクスを一個の純然たる歴史的研究対象として扱うこの種のマルクス研究」という定義づけは充分なものだろうか？ともあれ当該用語は、それほど判然としたものでないことだけは確かなようである。

むしろ問題は、当時ソ連・東欧型「社会主義」体制下、体制公認教義としての「マルクス＝レーニン主義」すなわちソヴィエト・マルクス主義から完全に独立して自由に行われてきた西欧的なマルクス研究の知的営為をいかに特徴づけるか、という点にこそ求められよう。戦前期以来長らく、旧ロシアと共有の後進性ゆえにソ連国家資本主義⁽⁴⁾教学（マルクス＝レーニ

ン主義) 体系に呪縛され支配されてきたわが国にとって、「西欧マルクス学」が独自の意味を持つとすれば、この一点においてであろう。

以下の小論は、David McLellan*の論考を素材として、わが国における研究状況とは対照的な「西欧マルクス学」を特徴づけようとする一つのケース・スタディである。

《注》

- (1) *A Dictionary of Marxist Thought*, Edited by Tom Bottomore, Blackwell Oxford 1983, p.523.
- (2) Perry Anderson, *Consideration on Western Marxism*, NLB, London 1976, 中野実訳『西欧マルクス主義』新評論, 1979年。
- (3) 杉原四郎・重田晃一・松岡保訳『マルクス伝』ミネルヴァ書房, 1976年, 「訳者あとがき」, 467ページ。
- (4) P. チャトパディヤイ著, 大谷・叶・谷江・前畑訳『ソ連国家資本主義論』(大月書店, 1999年)を参照のこと。原タイトルは「マルクスの資本概念とソヴィエトの経験」であり, 内容を強調するため訳者により改題されている。

なお, 大谷・大西・山口編『ソ連の「社会主義」とは何だったのか』(大月書店, 1996年)第4章「マルクス経済学史としての『社会主義』論」中に引用したポール・マティックの主張(140ページ)やパンネークの主張を参照のこと。明らかに「ソ連国家資本主義」説の起源は, 1930年代以降のトロツキズム潮流に先立つ20年代初期の評議会共産主義思想の源流のうちにあったというべきであろう。この点について多少詳しくは, 拙稿「A. パンネークの『恐慌原因の理論化』について」『経済志林』第65巻第3号, 1997年12月, 93-95ページを参照されたい。

* あらかじめ, 本稿では煩瑣なため敬称を略させていただくことをお断りしたい。

1. マルクス研究三部作

マクレランの「マルクス研究の三部作」については, その優れた邦訳者による解題⁽⁵⁾によって, すでに克明に伝えられているとおりである。すな

わち、『青年ヘーゲル派とカール・マルクス』（1969年）⁽⁶⁾から出発した『マルクス主義以前のマルクス』（1970年）研究⁽⁷⁾、「讃仰と悪罵との両極端を避けて、同情的批判の立場から」する『マルクス』（1973年）研究⁽⁸⁾、そして「マルクス主義諸思想の発展の相を描き出」そうとした『マルクス以後のマルクス主義』（1979年）研究⁽⁹⁾の三部が、それである。それら三部作が、マルクス著作集の英語抄訳編集⁽¹⁰⁾とともに、マクレランが30歳代のわずか10年の間に公刊されていたことは、いまさらながら驚嘆に値する。

その十年間は、ほぼ『資本論』第一巻刊行100周年とマルクス没後100年との狭間、すなわち1967～1983年に時期的に重なっている。わが国の一評者は、その時期を「マルクスの相対化と経済学史の対象」⁽¹¹⁾へ到るまでの「日本のマルクス経済学アカデミズムの黄金時代」⁽¹²⁾と特徴づけているが、それはその後の展開を見た場合、その限りにおいて妥当なものかもしれない。しかしながら、著者が率直に疑問とするのは、国家教学としてソヴィエト・マルクス主義が弁護対象たるソ連体制の解体とともに崩壊＝消失した事態との対比において、わが国における、言うところの「マルクス経済学アカデミズムの黄金時代」から一転した劇的退潮期への急変の理由が十分に明らかにされていない点である。その理由の一端は、あるいは「ソヴィエト・マルクス主義に反対してきたマルクス研究者も実はソヴィエト体制にささえられてきたこと」⁽¹³⁾によるのかもしれないが、はたしてそれだけであろうか？ いずれにせよ、「ソヴィエト・マルクス主義の権威主義的な支配と影響」⁽¹⁴⁾が、とりわけわが国において絶大であったことだけは確かなだけに、その間の深刻な省察が必要ではないだろうか。

いうまでもなくマクレランの「マルクス研究の三部作」は、始めから「ソヴィエト・マルクス主義」から自立して自由に行われた研究の成果であったため、その後における彼のマルクス主義への関説も、ソ連体制崩壊の前後ともに、変わらぬスタンスから行われている。

以下では、「マルクス研究の三部作」以後のマクレランの二論文を通し

て「西欧マルクス学」を特徴づけてみたい。その一つは、マルクス没後100年を記念して彼が編んだ論文集『マルクス：最初の一世紀』編者序文であり、その二つ目は、ソ連体制崩壊後の一定の時期を経て自己のマルクス研究の30年間を省察した論文「当時と現在：マルクスとマルクス主義」である。

〈注〉

- (5) 重田晃一・松岡保・若森章孝・小池渺訳『アフター・マルクス』新評論, 1985年, 「訳者あとがき」, 383ページ以下。
- (6) *The Young Hegelians and Karl Marx*, London 1969 (宮本十蔵訳『マルクス思想の形成』ミネルヴァ書房, 1971年)。
- (7) *Marx before Marxism*, London 1970 (西牟田久雄訳『マルクス主義以前のマルクス』勁草書房, 1972年)。
- (8) *Karl Marx; His Life and Thought*, Macmillan, London 1973 (前掲『マルクス伝』ミネルヴァ書房, 1976年)。
- (9) *Marxism after Marx; An Introduction*, Macmillan, London 1979 (前掲『アフター・マルクス』新評論, 1985年)。
- (10) *Karl Marx: The Early Texts*, Oxford 1971.
Marx's Grundrisse, London 1971.
Karl Marx: Selected Writings, London 1977. など。
- (11) 赤間道夫「第4章マルクス経済学—『講座』・『叢書』にみる軌跡」, 池尾愛子編『日本の経済学と経済学者—戦後の研究環境と政策形成』日本経済評論社, 1999年, 169ページ以下。
- (12) 同上書, 159ページ。
- (13) 内田弘「マルクス研究の現状と21世紀的課題」, 『経済学史学会年報』第39号, 2001年5月, 50ページ。
- (14) 同上。

2. マルクス100年：「回顧と展望」

『アフター・マルクス』刊行後4年目の1983年に、マクレランはマルクス没後100年を記念して論文集『マルクス：最初の一世紀』(*Marx: the*

First Hundred Years) を編んでいる⁽¹⁵⁾。そこには、マルクス主義の多様性を反映して、各専門領域を代表する論者による6編の論文が収録され、その時点における各々の領域ごとの回顧と展望が試みられていた。すなわち、収録順に Raymond Williams の「文化」、Victor Kiernan の「歴史」、Tom Bottomore の「社会学」、David McLellan 自身の「政治学」、Ernest Mandel の「経済学」、そして Roy Edgley の「哲学」が、それぞれある。編者マクレランによれば、それら6篇の論文そのものが「マルクスの関心と現存世界の認識に関する彼の貢献との驚くべき広がりを示している」のであって、「知的領域においては、マルクス自身」が、『パリ「経済学・哲学」草稿』の「万能なる個人」、あるいは『経済学批判要綱』の「社会的個人」というまさしく「共産主義的人間の原型」であった。

1) 解釈の困難性をもたらす要因

つまり、分業社会における個々人の活動部面の特異な専一化に対比された「誰もがひとつの専一的な活動部面を持たず、各自が彼の望むどのような部門でも目的を果たすことができるようになる共産主義社会」においては、社会が総生産を規制することによって、個人は專業者になることなく、「けっして狩人、漁師、牧牛者あるいは批評家になることなく、一人の人間として、朝には狩をし、午後には釣りをし、夕方には家畜の世話をし、夕食後には批評する」⁽¹⁶⁾ことになるという、あの理想の展望とのアナロジーとして、「マルクスは、経済学者や哲学者、あるいは歴史家になることなしに、経済学批判を生み出し、ヘーゲルを転倒させ、史的唯物論を生み出した」というのである⁽¹⁷⁾。こうしてマクレランによれば、「高度な微分積分をもてあそぶか、アイスキュロスのギリシャ語を研究することによって、集中的な社会および歴史研究からリラックスする人間として」、マルクスはきわめて広範な学際的領域にわたる研究と格闘していたために、あるいはマルクスの取り組む対象物の豊富さゆえに、後に「貧弱な食事に慣れたものにとっては消化不良をもたらす」マルクス解釈上の困難性

が生じることになる。

その第一のものは、マルクス没後一世紀の社会諸科学の巨大な発展それ自体が生み出した二つの面における「貧弱な結果」である。「第一に、ますます少ないことについて、ますます多くを知る学者たちによって狭い専門の内部で、それらの結果が生み出されるという垂直的な意味」と、「第二にそれらの結果が観察と計量にとって容易に利用できる社会の表面的な先入主から生じるという水平的な意味」において、つまり研究分野の特殊専門化および狭隘化とその観察計量を中心とする現象的把握ないし先入主とによってもたらされる社会研究の「貧弱な結果」は、ヘーゲルとともに「真理は全体性である」ことに固執してやまなかったマルクスにとって、「その狭軌の轍が彼の企ての幅を包み込むことは不可能であった」ことは自明である。「真理は全体性である」とは、「マルクス死後数十年間にわたり彼の後継者たちによってさえも理解されず、ルカーチによって焦点に連れ戻されて以来、多くの西欧マルクス主義の靈感となった見地である」という⁽¹⁸⁾。

そうした全体性への固執を考慮すれば、「マルクスの仕事が劇的なまでに未完のまま残されているという事実は驚くにあたらない」。刊行されているマルクスの著述の過半は、生計の足しに書いた彼自身「価値のないもの」（『新聞のくず』）と考えていた新聞論説からなり、「純粹に科学的な仕事」から区別されたが、後者の代表作たる『資本論』も「最終的に刊行された三つの巻でさえ（後の二巻は、かなり勝手な編集を行ったエンゲルスによって目の目を見たものである）、マルクスの意図したところの断片を示すにすぎない」し、さらにヘーゲル哲学と国家論についての執筆願望を表明しながら、結局「病氣、自己に課した厳格な学問的基準、生来の出版嫌い」によって未完に終わったことが、「彼の仕事の解説の困難性」をもたらしている第二の理由である⁽¹⁹⁾。

マルクスを解釈する際の第三の困難性は、彼の手がけた仕事の「かなりの部分が未刊行の草稿の形で残され」、しかも彼の死後長時間を経て初め

て公表されたという事実である。「さまざまな草稿が薄闇から現れてくるにつれて、それらはマルクスの仕事の相異なる側面を照らしだし、異なった焦点を提出してきた。特に、1930年頃に公表された『パリ草稿』は、マルクスについての『人間主義的』見解にとっての枠組みを提供したし、また1950年代半の西側における『要綱 (Grundrisse)』の出現は、『資本論』に固有な方法の根本的な再検討を可能ならしめた。」マクレランによれば、「マルクス死後の数十年間流行っていたやや経済決定論的なマルクスの読み方」は、『共産党宣言』や『資本論』を別にすれば広範に利用しうるマルクスの著作が少なかったことにも起因するという⁽²⁰⁾。

2) 読み解く際の注意点

こうしたマルクス解釈の困難性をもたらす諸要因を確認したうえで、マクレランはマルクスの「トルソの残された断片」を読み解く場合の注意を読者に喚起している。

何よりも「哲学者が彼の同時代の世界を飛び越えることができると想像することは、一個人が自分自身の年齢を飛び越えることができると想像することと同様に、まったくばかげている」というヘーゲルの言は、ヴィクトリア中期の「中産階級の一員」であったマルクスの社会生活および知的領域についても妥当するとして、マクレランはあの本格的『マルクス伝』の著者ならではといえる「人間マルクス」の知られざる側面を指摘しつつ、時代背景の重要性を指摘している。

当時、すなわち「ヴィクトリア中期の英国は、比較的安定していて未来に大いなる確信の持てるような時代であり場所であった。」

自然科学の進歩は特に目ざましく、その様子は1851年の世界初のロンドン万国博覧会に表現されたが、リープクネヒトは、とりわけマルクスが電気による蒸気の置き換えの革命的潜在力にどれほど強く魅了されたかを伝えるとともに、科学の進歩が「マルクスの世界観、とりわけ後に史的唯物論と呼ばれるもの」を規定したとさえ評価しているほどである。「こうし

た科学の進歩に対する楽観主義には合理性、民主主義そして自由といった諸価値に対する確信が結びついていたのであり、この確信はその当時のすべての進歩的知識人にとって共通のものであった」⁽²¹⁾。

「マルクスが執筆していた時代は、ヨーロッパが世界の中心であり、イングランド—それは、彼の呼ぶところでは『ブルジョア的宇宙の創造主 (demiurge) であった』—がヨーロッパの中心であったということを注意しておくことが同様に重要である。マルクスは、知的伝統と地理的立地によって主要な革命的危機は西欧の資本主義中心国において発展すると確信していた。だが、西欧において育まれたマルクスの思想は、東洋において、またマルクスの思いもよらない文脈において、適用されるところとなった。マルクス主義と低開発との結合は政治的諸問題を生み出し、とりわけマルクス自身の考えとほとんど無縁の権威主義的 [独裁] 政治 (authoritarian government) への傾向を生み出した。マルクスにとって、共産主義は西欧資本主義に内在するすべての積極的な傾向の相続人であり、とりわけその (たとえ非常に限られているにせよ) 政治的自由と経済的な富との相続人のはずであった。それゆえ、第三世界の社会主義あるいは中国共産主義とマルクス思想との間に十分なつながりを見出すのは困難なのである。多くの発展途上国におけるナショナリズムと結びついたマルクス主義の異説 (a version of Marxism) は、近代化過程への大衆の参加を鼓舞するためのイデオロギーとしての役割を果たす以上のものではない。」⁽²²⁾

マルクスの世界革命論と背馳するロシア革命後の「一国社会主義」の現実、その後の後進国近代化革命の先駆的モデルとはなりえても、マルクス本来の思想とは似て非なる「マルクス主義の異説」の一つにすぎないという指摘は、それまでのソヴィエト・マルクス主義的公式論に呪縛されていたものにとっては蒙を啓くものであろう。

しかるに、「大衆的政治運動の鼓吹としてのマルクス思想のまさにその成功こそが、その思想の体系化、硬直化そして歪みをもたらした。この過

程はエンゲルスとともに始まったが、彼はその友よりも12年間の決定的な時期を生き残り、『反デューリング論』におけるように）非常に包括的で明快なためにマルクス自身の著作より受け入れやすいマルクス主義の異説の普及に尽力した。」ここにレーニン→スターリンの「正統的」継承発展ドグマを外挿すれば、「マルクス=レーニン主義」教義となることは、さほど不思議ではない。だが、マルクスがフランスの後継者たちによる彼の思想の単純化に抗議して自分はマルクス主義者ではないと主張したように、第1 インターナショナルにおける「バクニン主義者との政治闘争」において「マルクス主義という言葉が最初に登場」して以来、「マルクス主義は、ずっと政治的フットボールとして使用されてきた」のであり、マルクス主義運動が成長して反目しあう諸集団に分裂するにつれて、おのおのの集団ごとに自らの政策に都合なマルクス解釈を作り出す傾向があった」ために、『アフター・マルクス』において詳細に取り上げられているような、多種多様な異説に分化してきたというのである⁽²³⁾。

そこで最後に、マクレランは、マルクスがわれわれに残した「問題群」をつぎの3点に集約して稿を閉じている。まず第1に、「人間社会の一歴史的、文化的、社会学的、経済学的研究における中心問題は、社会をどのように分割するか、そして分割してから諸区分間の関係をどのように記述するかということである」が、「経済優位性の一般理論」がマルクス主義のアイデンティティであることだけは確かだとしても、この問題が残されている。第2に、いかなる組織も「寡頭政治の鉄の法則を回避できない以上、その組織はそれ自身が体現していない諸原理をもつ社会への道をどのように指し示すことができるのだろうか？」という「政治的な問題」である。そして第3に、「認識論および存在論の一般的問題との関係というより大きな哲学上の問題」、「現実性の究極の性質および真の認識にとっての基準という問題」であって、マルクスの新構造主義的読み方のスピノザへの哲学的後退、「マルクス主義内のカントへの回帰」、ヘーゲルを通してマルクスを読むルカーチ的傾向等々、「永遠の疑問は永遠に残されたまま

である」というのである⁽²⁴⁾。

《注》

- (15) *Marx: the First Hundred Years*, Edited by David McLellan, Fontana Paperbacks, Oxford 1983.
- (16) The German Ideology, in *K. Marx, Selected Writings*, ed. by D. McLellan (Oxford, 1977), p.169.
- (17) David McLellan, Editor's Introduction, *Marx: the First Hundred Years*, *op. cit.*, p.7.
- (18) *Ibid.*, p.8.
- (19) *Ibid.*, pp.8-9.
- (20) *Ibid.*, p.9.
- (21) *Ibid.*, p.10.
- (22) *Ibid.*, pp.10-11.
- (23) *Ibid.*, p.11.
- (24) *Ibid.*, pp.12-13.

3. 「当時と現在」

その後十数年を経た1999年の論考「当時と現在：マルクスとマルクス主義」は、あの象徴的なベルリンの壁の開放・解体からちょうど十年目にあたるが、それまでの自己のマルクス研究の30年間に重ねてその間の西欧マルクス学の「アカデミックな研究」をマクレランなりに概観し特徴づけたものである。

「ソヴィエト連邦や東欧の共産主義体制の崩壊は、マルクスおよびマルクス主義の研究にどのような影響をもたらしたのだろうか？今のところ、その影響は多くはない。それでなくとも、ソヴィエトの実験はマルクス思想を体現するものではなかったと主張する人々が存在しているし、私もその一人である。マルクスの外観的歴史展望では、社会主義は資本主義の肩に乗りかかるのであり、ソヴィエト連邦の70年の歴史は、西側における生

産力の緩慢な成長を圧縮する一種の発展の近道とみなすことができ、その終焉は苦痛をもってロシアを世界史の主流に引き戻すものであった。』⁽²⁵⁾ ソ連東欧型「社会主義」体制解体後のマルクスおよびマルクス主義の研究への影響は、それほど大きなものではないという彼の指摘は、わが国の状況に比べて対極的であり瞠目に値しよう。

ここでマクレランは、「ソヴィエト連邦とその衛星諸国は現実には（国家的な）資本主義社会であると常づね主張してきた人たちが」が、「今では自分自身のことを共産主義の組織員という代わりに資本主義企業の運営管理者と呼んでいる点を別とすれば、同じ古い人々が依然として生産力を担い管理しているのだ、と正当にも主張している」ことを紹介している。その具体的細目は不明ながら、今日の西欧世界において、われわれと同様にソ連東欧型「社会主義」を史的唯物論の視角から「国家資本主義」と規定している論者の存在を伝えるものであろう⁽²⁶⁾。

ともあれ、マクレランによる当該期間の回顧のスタンスは、「知的パラダイムの広範なシフト」による影響を強く自覚するところにある。「過去30年余りにわたってマルクスとマルクス主義に関するアカデミックな研究が展開されてきたところの方法は、……知的パラダイムの広範なシフトによって強い影響を受けてきた。したがって、西欧におけるマルクス解釈の歴史を瞥見する上での有益な一つの方法は、この社会における持続的に支配的な知的傾向を感知し、さらに一体化する模索の歴史としてみることである。』⁽²⁷⁾彼自身こうした視座から、マルクス主義のほぼ130年の歴史を瞥見して、マルクス自身がヘーゲルの影響下にあったにもかかわらず、マルクス後期の著作やエンゲルスの著作は「実証主義と科学にたいする19世紀的熱狂」に影響され、第一次世界大戦以前の20年間のドイツ社会民主党を支配していたこと、戦後はヘーゲル精神がルカーチにみいだされ、フロイト (Freud) がフランクフルト学派のライヒ (Reich)、マルクーゼ (Marcuse)、ハーバーマス (Habermas) に影響を与え、またその後のナチズムの台頭がマルクス主義理論の中心をフランスへシフトさせ、実存主

義を登場させたこと、その後第二次世界大戦後の「構造主義の急激な勃興と衰退、ポスト構造主義の系統的な無政府性、そして1980年代の、明らかな形容矛盾たる『合理的選択』のマルクス主義の登場」が続いたこと、と概略をトレースしたうえで、本題である直近の過去30年に向かっている⁽²⁷⁾。

《注》

- (25) David McLellan, 'Then and Now: Marx and Marxism, in *Political Studies*, Vol.47 Number 5 (December 1999), published by the Political Studies Association and Blackwell Publishers, p.965.

拙訳「当時と現在：マルクスとマルクス主義」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第36号、2001年 八朔社、78-9ページ。

- (26) Ibid., pp.965-6. 同上、79ページ。本稿「はじめに」の注(4)、p.3を参照のこと。

- (27) Ibid., p.955. 同上、67-8ページ。

1) 1960-70年頃の西欧マルクス学

マクレランが最初にマルクス思想に取り組んだ1960年代は、西欧と北米における経済成長がもたらす「豊かな社会」が「1968年の動乱において頂点に達する資本主義的物質主義に対する深刻な批判」と結びついた一時代であった。「思想を社会的現実に関わり付けようとするマルクスの試みに関心を持った一カトリック教徒として」マクレランは、バウアー (Bauer)、フォイエルバッハ (Feuerbach)、シュティルナー (Stirner) そしてマルクスなど「青年ヘーゲル主義運動に引き寄せられていった。」特に「若きマルクスは、当時（そして依然なお）、人間の秘める潜在力に関わるこの上なく豊かな画像を提供するように思われたのである。」⁽²⁸⁾

ところが、意外にも当時「マルクスに関して英語で利用できる文献は極端に限られていた。」マクレランが挙げているのは、わずかに、ロバート・タッカー (Robert Tucker) 『カール・マルクスにおける哲学と神話』

(1961年)とユージン・カメンカ (Eugene Kamenka)『マルクス主義の倫理的基礎』(1962年)の二著のみである。しかし、彼によれば、その頃から「三つの要因がその後の爆発的なマルクス研究を可能ならしめた」という⁽²⁹⁾。第一に、初期マルクスの諸著作の英訳本の普及、特に1959年パリ草稿[『経済学・哲学草稿』(1844年)]の最初の英語版の刊行、第二に、これに先立ちドイツでルカーチ (Lukács) とマルクーゼ (Marcuse) が、フランスでイポリット (Hyppolite) とコジェーフ (Kojève) が基礎を築いていたところの「英語世界におけるヘーゲルへの関心の復活」、第三に、「最も重要なものとして、1956年のフルシチョフのスターリン批判の衝撃とマルクス主義世界における多元主義の増大」である。マクレランによれば、これら三要因が、1960-70年頃の西欧マルクス学を「人間主義的およびヘーゲル主義的なマルクス解釈」として特徴づけたとするのである。こうしてエーリッヒ・フロム (Erich Fromm) がマルクスを「精神的実存主義者」と呼んだように、マルクスはキェルケゴールとともに「ヘーゲルの実存主義的継承者とみなされる」ことができ、「資本主義社会における人間の疎外に関するマルクスの説明」は1960年代の「豊かで複雑な社会にいつそう当てはまる」ものだと言われた⁽³⁰⁾、という。

また、「スターリン主義の死せる手の下から、ソヴィエト版とつながりのないマルクス主義のさまざまな形態が現われ」イギリスではペリー・アンダーソン (Perry Anderson) の『ニューレフト・レビュー』やラルフ・ミリバンド (Ralph Miliband) とジョン・サヴィル (John Saville) の『ソーシャリスト・レジスター』が、さらにチェコスロヴァキア、ポーランド、そしてユーゴスラヴィアなどの「東欧から英語に翻訳された諸著作」が「ソヴィエト的な知的一枚岩を打ち破るうえで強力なインパクトをもった」のであり、とりわけ「若きマルクスの人間主義的態度が東欧において残存するスターリン主義的諸要素に反対するための拠り所として用いられた」⁽³¹⁾、という。チェコスロヴァキアの「人間の顔をした社会主義」や「2,000語」宣言は、「マルクスの初期の作品に非常に近似している」

し、ポーランドのコラコフスキー (Kolakowski)、ユーゴスラヴィアの哲学雑誌『プラクシス』の活動が、その具体例である。

《注》

- (28) Ibid., p.955. 同上, 68ページ。
- (29) Ibid., p.956. 同上, 69ページ。
- (30) Ibid., p.957. 同上, 69ページ。
- (31) Ibid., p.957. 同上, 70ページ。

2) 1970年代以降

ところが「こうした熱き心のヒューマニストとしてのマルクスという解釈は、1970年代には厳しく論駁」⁽³²⁾されることになる。「構造主義的な言語学、心理学そして人間学という流行の権威を利用してマルクスを彼以前の時代の構造主義者として『復位する』こと」を狙うアルチュセール (Althusser) の『マルクスのために』と『「資本論」を読む』(いずれも原著は、1965年初出)の英語訳が1969年と1970年に相次いで刊行された後、フランスの構造主義の流行が西欧マルクス学に顕著な影響を及ぼし始めたからである⁽³³⁾。

マクレランによると、構造主義とは社会システムを理解する鍵は、その諸部分の構造的連関性であり、これら諸部分がシステムの規制原理によって相互に関係付けられる方法であるとする見解のことであり、コントを髣髴させるアルチュセールの超時間適合理性の探求は、歴史と哲学の双方の追放、ヒューマニストとしての、ヘーゲル主義者としての、あるいは歴史家としての初期マルクスの完全な拒絶を意図するものと解説される⁽³⁴⁾。アルチュセールの「理論的分析への神秘的な強調と経験的な仕事への軽蔑は、ある一定のタイプの知識人に歓迎され」、文化研究のステュアート・ホール (Stuart Hall) とテリー・イーグルトン (Terry Eagleton) や社会学のバリイ・ヒンデス (Barry Hindess) とポール・ハースト (Paul Hirst) のほか、政治学のニコス・プーランツァス (Nicos Poulantzas) までその

影響を受けたという。

他方で同じ1970年代において、「過度に構造主義的な」マルクス主義に「不満を感じていた人たちにとって魅力的なものとなった」のは、1971年に英語版が刊行されたグラムシ（Gramsci）の『獄中ノート選集』であった。マクレランの説明によれば、とりわけ人々の共感を得たのは、「ウェーバーによって分析された官僚主義的で技術的な合理性が、労働者階級のあらゆる創造的ないし革新的な独創を抑制するように機能するところの、資本主義のイデオロギー的ヘゲモニーの構成要素であった」とするグラムシの「西側ブルジョア民主主義における資本主義の繁栄能力という難問への回答」⁽³⁵⁾である。

さらに1970年代の西欧マルクス学を彩るものとして、「マルクスから最も遠く離れながら（また、恐らくそれゆえに）最も広がりのある」フランクフルト学派の影響が指摘されている。マーチン・ジェイ（Martin Jay）の『弁証法的想像力』（1973年）とフレデリック・ジェイムソン（Frederick Jameson）の『マルクス主義と形態』（1971年）のほか、「アドルノとベンヤミンの仕事に基づいて美学に関するきわめて多様なマルクス主義的著述が1970年代に展開した」⁽³⁶⁾とされるが、この点には立ち入らない。

〈注〉

(32) Ibid., p.957. 同上, 70ページ。

(33) Ibid., p.959. 同上, 71ページ。

(34) Ibid., p.959. 同上, 72ページ。

(35) Ibid., p.960. 同上, 73ページ。

(36) Ibid., p.961. 同上, 75ページ。

3) その後

時期的にはその後、特に1980年代以降の西欧マルクス学は、どのような状況におかれているのだろうか。

そのひとつは、「レーガンとサッチャーの時代」に台頭する「ポスト・モ

ダニズム」との関係性であり、そのマルクス主義の伝統からする最良の成果は、ジェイムソンの『ポスト・モダニズム』（1991年）とハーヴェイ（David Harvey）の『ポスト・モダニティの条件』（1990年）である⁽³⁷⁾。この前者によれば、「ポスト・モダニズム」は、「後期資本主義の文化的論理とみることができる」として、「情報社会」が新たな言語理論を生み出し、「美的生産」が商品生産のうちに編入され、「時間と空間がますます情報ハイウェイによって圧縮され、ニュース報道が『物語』とされ、残忍に武装した国家が『プレイヤー』とされ、……現実がヴァーチャルになり、人々がその個性についてしっかりとした観念を喪失し始める」という。

さらに、西欧マルクス学には、階級に代替する社会の最重要区分として、人種あるいは民族、さらにはジェンダーの区分をより重視する問題や生産力の発展のもたらす楽観的展望への生態学的懐疑の（環境）問題が投げかけられている⁽³⁸⁾。

マクレランはいう、「にもかかわらず、マルクス主義的伝統の中にある多くのものは、新しい社会運動、同一性政治学、そしてポスト・モダニズム一般を積極的に歓迎した。彼らは、それらを古い権威主義的イデオロギー〔マルクス・レーニン主義〕を破壊し、そうすることによって相異なる集団的な社会的実践が咲きうる超多元的な社会の出現を暗示するものとみなした。』⁽³⁹⁾その一例として挙げられているのは、ラクラウ（Laclau）とムフ（Mouffe）の『ヘゲモニーと社会主義戦略』（1985年）である。

以上とは異なる西欧マルクス学の新動向として、驚くべきことに「マルクス主義は独自の哲学を持たなかったし、持つ必要もなかったという見解を抱いていた」G. A. コーエン（Cohen）、ジョン・ローマー（John Roemer）、そしてジョン・エルスター（John Elster）に代表される「分析的」ないし「合理的選択の」マルクス主義が存在する。それが、マクレランのいうように「主流派の社会および政治思想と同じ哲学的土台と方法論的アプローチを、とりわけ新古典派経済学の方法論的個人主義とパレートやハイエクのような著者の仕事への大幅な屈折を利用する」⁽⁴⁰⁾とすれば、

それ自体マルクス主義の範疇に含まれうるかどうかさえ疑問であるが、ここではそれ以上問わない。ただ「合理的選択のマルクス主義者は、マルクス以外のマルクス主義者の著作をほとんど論じていないし、マルクス以降のマルクス主義のたいていの著作をさほど尊重していない」⁽⁴¹⁾ことだけは、確かなようである。

さらに、マクレランによれば、「1980年代の道徳的荒廃は、いやおうなくマルクス主義と倫理という問題への関心の復活をもたらした」として、Steven Lukes, George Brenkert, Allen Wood, Scott Meikle, Philip Kainの著作をあげているが、これも省略する⁽⁴²⁾。

最後にマクレランは、マルクスの示した方法（アプローチ）が「さまざまな領域で革新的で洞察力に満ちたものでありうることを示す最新の傍証として、トランス（John Torrance）の『カール・マルクスの認識の理論』（1995年）⁽⁴³⁾とブレナー（Robert Brenner）の論文「不均等発展と長期下降」（1998年）⁽⁴⁴⁾をあげて、その現実世界認識の上での変わらぬ有効性を確認するとともに、「自由主義的資本主義よりも良いものは存在しないという十年前のフクヤマの見解は、ますます悲観的で受け入れがたいものになっている」と指摘して、西欧マルクス学の過去30年間の回顧を結んでいる⁽⁴⁵⁾。

《注》

(37) Ibid., p.962. 同上, 75ページ。

(38) Ibid., p.963. 同上, 76ページ。

(39) Ibid. 同上。

(40) Ibid., p.964. 同上, 77ページ。

(41) M. C. Howard & J. E. King, *A History of Marxian Economics: vol.II 1929-1990*. Macmillan Press 1992, p.336. 振津純雄訳『マルクス経済学の歴史』ナカニシヤ出版〔下〕1998年, 498ページ。

(42) D. McLellan, op. cit., p.965. 前掲, 78ページ。

(43) John Torrance, *Karl Marx's Theory of Ideas*, Cambridge University Press 1995.

- (44) Robert Brenner, Uneven Development and Long Downturn: the Advanced Capitalist Economies from Boom to Stagnation, 1950-1998, *New Left Review*, no.229 (May-June 1998).
- (45) Ibid., p.966. 同上, 79ページ。

おわりに

以上、「マルクス研究の三部作」以後のマクレランの二論文、『マルクス：最初の一世紀』編者序文（1983年）と「当時と現在：マルクスとマルクス主義」（1999年）をトレースすることによって、広範多岐にわたる「西欧マルクス学」の概略を特徴づけてきた。それは、わが国におけるマルクス研究が圧倒的な影響を受けてきたソヴィエト・マルクス主義とは著しく相違するものであり、ひとまずここでは内容を問わないとして、「西欧諸国では、ソ連や中国におけるマルクス主義の急速な凋落とは無関係に、マルクスの思想について地道な学問的研究が続けられている」⁽⁴⁶⁾ことの証左でもある。

したがってまた、ソヴィエト・マルクス主義が弁護対象たるソ連「社会主義」体制の崩壊とともに解体＝消失したことを反映して、「マルクス経済学アカデミズムの黄金時代」から一転して劇的退潮期へと急変したわが国のマルクス学と対照的に、「西欧マルクス学」においては、ソ連体制の崩壊はマルクス研究にさほど影響を与えてはいないということも当然かもしれない。

その一例証として、先のマクレランの結語に照応する現代西欧マルクス学の一論者の見解を是非とも紹介しておきたい。F. フクヤマなどがいうように「社会的完成は、自由民主主義の形式において達成された」という見解は、「それがいかに洞察力に富み、いくらかのよき意図を持ち合わせたアイディアであるように見えるにせよ、アフリカにおいて人々を飢えさせ、東アジアにおいて女性を使い捨ての廉価な労働力としてもちい、ラテ

ン・アメリカ社会を返済不能な債務の中に突き落としているところの、不均等な資本主義発展の継続を覆い隠すイデオロギー的な役割に奉仕するものと見なければならぬ。われわれは、グローバル・キャピタリズムを構造的に解釈することの変わらぬ必要性を見出し、構造的マルクス主義にたいする〔1980年代の〕批判は、実際にはその過度の合理主義にたいする批判であったと考えて、マルクス主義の死という風評は尚早であったと結論する。生産様式の分析は、歴史的発展過程の最も洞察力に富んだ批判的理論であり続けるし、民主主義的社会主義は、未来における人類の必要に合致する発展形態の最良の希望であり続ける。』⁽⁴⁷⁾

また、マクレラン自身の『アフター・マルクス』の第3版⁽⁴⁸⁾が1998年に、ベン・ファインの『マルクスの資本論』が全面改訂されて第4版⁽⁴⁹⁾が2004年に刊行されているほか、2003年にはサッド＝フィルホ編の19人の論者からなる『反資本主義—マルクス主義的序説』⁽⁵⁰⁾も出版されるなど、「西欧マルクス学」は依然として健在なのである。

〈注〉

(46) 村上隆夫、テレル・カーヴァー『マルクス事典』（未来社、1991年）、「訳者あとがき」、234ページ。

(47) Richard Peet, *Global Capitalism: Theories of societal development*, London & New York: Routledge 1991, p.13. [] 内は引用者による補足。

(48) David McLellan, *After Marx: An Introduction*, Third Edition, Macmillan Press 1998.

(49) Ben Fine & Alfred Saad-Filho, *Marx's Capital*, Fourth Edition, Pluto Press 2003.

(50) Edited by Alfred Saad-Filho, *Anti-Capitalism: A Marxist Introduction*, Pluto Press 2003.

(2005年8月15日 脱稿)

(2005年8月29日 補正)